

を緻で起こすのが初仕事であった。義兄と姉と私の三人の初めての共同作業だった。

入植から今日まで

開拓は文字通り肉体労働。農具は何一つ無く、義兄が日雇いをして一つ一つ用意した。素足にフキの葉を巻いて一畝一畝起こし、もっくれを焼き開いた。無肥料の土地では一・二年は種子よりも小さな芋。それでも有り難かった。

昭和二十六年に結婚と同時に分家、姉夫婦は新たな土地に入植した。二十八年に長女を出産したが未熟児のため九か月で死亡。昭和三十年には姉が女兒を出産、しかし、義兄が突然心臓麻痺で死亡した。すでに義兄たちは酪農経営をしていたので、二戸分の農業をしなければならず、四キロの道の往復はずいぶん難儀であった。次女・長男・次男と育てるうち、昭和四十六年十二月、突然夫が急性肺炎で死亡した。この時から私の苦闘が始まった。

この時、姪は高一、次女中三、長男中一、次男小五、乳牛二十四頭、土地二戸分で五百二十アール。泣いている暇がなかった。どうして生きていったらよいか、ただ

無我夢中で子供たちと姉と六人力を合わせ、がんばって生きてきた。

主人を亡くしてからいろいろなことがあったけれど、幸い子供たちはのびのびと成長してくれ、皆、高校を出、姪は東京に嫁いで三人の母、私の次女は青森に嫁いで三人の母、長男も三人の父、次男も結婚し一人の父。これからは孫をみながら自分の人生を取りもどそうと思った時、昭和六十一年十一月、思いもよらず子宮癌の手術をした。

幸い初期であったから快復も早かったが、放射線の治療を受けたため、その後遺症で無理のできない体になった。引き揚げの時より二度目の生き返り、この命を大切に、命のある限り生きたいと思っている。

勤労奉仕隊から開拓花嫁に

山形県 坂野 マサイ

私達の青春時代は国を挙げての戦争の最中で、大勢の

人が出征してゆきました。また、満州開拓青少年義勇軍となって、小学校を卒業したばかりの二男三男は、先生や県の斡旋で大陸に行ったのです。

その頃分村計画というのがある、昭和十五年頃は近所から女の人が農学校で花嫁授業をうけて渡満したものでした。昭和十六年に満州開拓団勤労奉仕隊ができて、六か月の奉仕を終えて帰ってきた人もおりました。

昭和十七年にも奉仕隊員を募集、女の人も加わる事が出来るということであり、奉仕を終わって帰国したら満州大豆を一人につき八俵を下さるとのことでした。どんな所か私も行って見てみようかと家で話したら、父は賛成してくれましたので、友達の堀井みつえ、鈴木とみえ、鏡帝治、木村おじ、鈴木庄兵衛等、軽六人が八幡神社で壮行式を挙げて頂きましたのは、三月十五日だったと思います。酒井久三郎村長さんを始め、村の皆様からお見送りして頂き、上山駅を出発したのです。そして舞鶴港から船に乗り、朝鮮に上陸、汽車で東安に着き、軍のトラックで宝清を経由して目的の小城子開拓団に夕方着いたのです。

開拓団では私達のために赤飯をご馳走して下さったと思いましたが、よく見ると高粱に小豆のようなビルマーでした。

私達奉仕隊の仕事は水田作業でした。春とは言え冷水で体を冷やしたのか隊員の二人が肺炎になり、隊員一同心配して男ばかりの中に女三人だけで医者もおらず、私達三人が炊事をしておりましたが、みんなが途方にくれていた。私が一番年上なので、私に病人の看護をするように言われました。何も知らないので心配でしたけれども、病気が重くなっていけないと思って、滝口先生の所から必要な物を借りてきて一生懸命看護しました。そのとき軍隊が小城子に演習にきておりましたので、食料の残り物を分けて頂いたりして回復する迄半月もかかりました。それでも本当に命が助かり、漸くみんな安心しました。

楽しいこと、苦しいこと色々なことがありました。私達が六か月の奉仕も終わろうとした時、独身の男子が多勢おったものですから、いろいろお話しをもちかけられ、見合いをさせられ、故郷の親に便りを出したが、遠いも

のですから承諾の返事も待たずにモンベ姿で合同結婚式を挙げました。

私達は六か月の奉仕を終わってハルピン、奉天、旅順を見て帰りました。母親からは結婚した私に「満州さ行って来たら、何ほも良い所があったのに」と言われ、私は責任上どうしたらよいか迷いました。三人とも親達からいろいろ言われましたが、満州で待っている皆様に悪いと思つて、十八年の二月に三人で再び渡満しました。そして十月には子供が生まれました。

二十年の五月頃、畑で豆蒔きをしていた所に上杉団長が召集令状を持ってこられて、「おめでとう」と挨拶されて夫は出征して行きました。大からは便りが一度きただけで、そのあとは連絡がなくなりました。

八月引揚げの難行が始まり、子供はハルピンの新香坊で栄養失調の障害で亡くなり、塩野さんにお経をあげて頂きました。人の命は露の命といいますが、はかないものだとしみじみと思いました。私は全く骨と皮ばかりに痩せて郷里に帰りつきました。心もぼろぼろになって、止めどなく流れる涙をどうすることもできなかったのだ

あります。

大陸の花嫁となった私達三人、私の夫は東村山郡成生出身の武田義蔵です。子供は義一と名付けました。

鈴木（旧姓）とみえさんの夫は菖蒲出身の太田文治さん。

堀井（旧姓）みつえさんの夫は小倉出身の伊藤栄吉さんです。

私は引揚げてきてから十年間、夫の帰りを待っておりました。生死不明のまま待った十年はとても長く、また、とても短く過ぎました。

月日はどんどん過ぎ去りました。私は再婚してもう三十六年になります。

私は開拓奉仕隊の教訓を生かして地域社会への奉仕活動を続けておりますが、昭和五十六年二月に上市市青少年育成市民会議、市民大会で善行表彰を受けました。今後とも健康でいる限り、社会奉仕を続けさせていただく所存であります。